紙法七部集小鏡

全

[illegible]まつ代の末[illegible]に
一つの理をしめしける[illegible]
蕉翁の宗の俳諧をしたひて伊賀の
やよひの頃[illegible]まくらを[illegible]あはいこ[illegible]の
跡をたつね小葉[illegible]しつゝ[illegible]
[illegible]しこ[illegible]翁の[illegible]
[illegible]桜[illegible]つゝみ[illegible]

たゝよふ飛雲のことし　あらしかなりしも
桜あきらかのふてゆけさはやとてわか友
河丸大嶺をしたひしかもしよはゆへし
はつしかけさかに　おくりて帰に
味きのく　きり露にさそはれかなかな
この日も　いつの世のことしらはさりとう
けふこそは此ほとのかきりのこと録
出して世の人かけこきはやしかの桜ふ
録をかし辺しはしやのやきやうに入けれ
この江よりまよくし申ものしけのこと
久升のゝ後　録ゆゑのかさむらの
尚古事を安きし　備中やつの事
とゝおって古の我けし　我くせと
たゝて　やはしとしいるまゝに　跡の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文化四年十月　吸露庵桂素

七郎小説　猿蓑之郎

月院社　何丸　口授
男尺木堂公石筆記

○猿蓑逆志抄

千子八京向井益麦院法下元毋ゥ女元桂ゥ
妹きくへ

評纂虚栗ヨ去来妹千子同集ヨ兄去来ヨ供ーて
伴緊ヘ諸ゥ乃すの〳〵天の心を
いせまてのトゥさ乃連やゥきの丁　千子
彩のたゥ〳〵二ア赤まて去来ゥ妹とあれハ長もて
先ゝせすむハある〳〵すゥ

遊女奥州八朱郎新吉原茗荷屋名妓歌鉢

香茶に長し宛然書の史一世に知而ゝその
庵に因て名付しとかや

評 彩吉京に奥州といふ抱君があれハ互てこも女にてハ
よもあらじ此何となれハ猿蓑集ハ京都にて著すま
よて洛京の女なるが故に風調を書ぬなるへし江戸の
奥州なれハ必江戸と肩書なくてハ叶まじ同名なき
亀翁 金峯 岩翁 其江 山川 千里
卜宅 遠水 渓石 山店 普船 等 江戸誰とこそ
ことハ外あるまじ風雨を記せり京江戸に同名の抱女を
書たやなしとせしハ何よりの説教なる手やうるかそ
しくハ腥除小境を見へし 初日の出 貞享二年の
下かゝ之 奥州 唐士 和泉 大橋 小太夫 吉政

是当時の六哥仙と云て作者ハ洛外野人作書世多新
三白居士の自記なり迷ふへからず
序文ハ正竹が書にて翁の代稿にて史しけ
なりしけど長ければ略す

評 晋其ハ角とあれハさおもふハむへ之其ハ角が八翁がの
境界をもて史人にハおちかさし只心をもて極人なれハ
翁の稽なる事ハ知ぬへし 韓氏ハ韓氏柳氏ハ柳氏の
風あり喜撰の句に小町の句におのしき見ゆべくて
仮令名をなくとも知る人ぞ知へし 此序史しして
こを角にハあらずされハ近世芭蕉翁の尻馬に乗る
しるもおもふへのゝ手百篇も二百篇も讀的ゝこを説を
つひくあるまいし因し十哲の内にてもオ一におゐ

余りのすぐれたる文考の文書と一行の後ろ書きハ主な
き考と書れ次に許六の文書と二行よむ時ハ忽ち許六と
ものゝ夫より外の人〳〵の文章ハ熟慮の後に命じ
て対句と共角の境を見命むハ玉て新さかや翁の
文書共角の文書数篇あるを読み赤ちゝかけハ
ものゝめてその美なるゝを覚るく〳〵
さつ時雨猪も小舟をかしけと
同集に猪の句をいくつも書かせ称杖も巴使の
時猪使ことゝもをうるおすといて雑者のおもひ
小舟をかしけくとゝふの中に含て情余りあると
味ふ〳〵変〳〵て古所孔とゝて翁の俳力を
おとすに似たりとゝ云ふ

評定おゝの方ゝ浪化公の使のまゝふ〳〵て序文かも
去来凡兆のかゝけなるゆゑとあれハ是ハ解ハ是ゝとと
ふ〳〵〳〵ゆゑや小舟をかしけとゝふ句の解に巴使の
時猪とゝふ句をもて解すゝて鼻を孔て平に純の引
事とゝやいとも変なゝさ句に時猪とゝて文にあゝて
ゝ上古方孔とゝて翁の俳力をおとす事なゝ
ゝハいとなる事ゝて古方孔の句も殊に集の
うちに小舟くあゝて古方孔の立入と古方孔と
猪句ゝ是ハ古方の立入と古方孔と
仏堂の境に入て
むつゝ〳〵や京ゝの隣の一時雨
此首長ゝ句ゝ二十二丁目に論す

歩人の時雨ふけぬく眺回の句

注略す

評曰今の解大読の注のごとき俗出せり只それは矣を
添ふるまでの事抑古書よりはをする者仏の書に云
後ふ〳〵てそれは見非をくまてはすべきなり漢
の書籍古今皆おなし夫よりの事や我腹より出る
やうは全集集の古歌丸之と利口ぶる記せる腹黒
男と云初老の昔より見る霞会を見れば古は彩は
の書七部よりかゝるる斗四十七篇形云部は往来して
法家の言案を伝記門弟の編ハ書稿唄ハも
心をこめ既は書中は古注一書説云く他人の骨形を
盗はせ或やうかと心をあらしてはは解はおよしハ今年

七十はいくらて杖夫のみは書今を備る見度の道さるを
るる故こさるを巨魁矢変まて百年来の大勢の骨形
を模元はするの敵討はかくハ中なれ形見下の問答は
至て美を見すて〳〵されハ逆笑見て〳〵見といふハ
あ〳〵寸嗅く安人の心はまちする斗

彩田は稗穀物るる〳〵れの歌

安〳〵さる通りふて田家村時雨の呆寂なり粉売
ふてハは柄なり稗かゝるて白をなるる彩田と
ふは越出来ると知て

評粉かゝふてさは柄なるる安〳〵ぬはく粉かゝハ
粉をすて米の皮なるれハ糠といふて彩田はあもむ
なり見稗売勿論之彩田とるかゝるは切起〳〵る

田なしハ先耕を作りて衝地面の肥こるを切て焼き、
うゝ彩く穂を切れてさゝ耕かゝを、土底新田ハ焼捨て
地肥ーしてすゝきを刈出ーての仮家なゝすや新田の
匂のほゝ新田の沢もきらすして解き杜撰世
俳花そしする　きこのむ蕉切し
匂の表を蕉切かて匂をなゝうゝ俳花と蕉切
このかけ合せ小六月の天氣をなせて蕉切も又
元出むやといくるく裏の庭言ゝ晋子ゝ自好の
匂ふーて我ハもゝや俳花のさく時さくなきよ
樹木ゝ今俳花の咲げるハ樹木ゝさくおくり
くる分の上やて既きーてそれふもきく事
なゝすハむーちいつその支名利を出ひさしと

除言を含こてるゝつまの物術と云ーーきむと
不如ーいふ我ゝおなしーー不及ゝいふ同言なり
切ゝハ名利を防絶する言蕉ゝ寧ゝかけさる
ゝかゝなりゝ時ふーー寧ゝハ形の徳かーて
敬云ゝ拙二ゝある時それゝハ方をゝいふ言
なり此作ゝ祖翁の俳言かーて晋子ゝ多き
匂殿なり
評よくもかうむつうゝ考了ものそ夫てゝ俳匂
てハなく悉皆徳ゝ祖翁も晋子も迷惑ゝおわす
らむ西風ゝハメヽキヲシヘゝいかゝ文字なれハいいかふも
晃来なーー西風体ゝもゝ言の花の時数ゝ蕉なるを
俳花ゝ咲くゝよてそれふも又変む光陰ハ矢のゆー

春の花ハ桜花なりさるもうつくしき花蕊も切蕊なる
なりる夏よさミ心ひめてくしくさる者ハて秋ハさ
風や頬腔にくむ人の顔
風の吹きまるゝ虫歯の痛をかくしゐる人の神経
眼なる人くの心つゝさる白案ハして木枯の
印をたれて志ゝも風の刺を失ゝ寸ハ風ハ
頬えしなやめる人の鬢ハ王昭君ゝ相ハ趙く
馬上の姿ハつれゝまさゝむ上陽人ゝひとり閨ハ
うゝめるさまゝ牧ハもい合すゝ白のハ男女
美魂痩肥ハなゝれゝゝ自然ハ美婦人の加ゝち
ミハ安ゝさり人の表
志ゝる

評書くゝ入不ゝ変を考てゝのハ論ハおよ
ゝ称ハ安人ハ笑ひを誘ゝりて略す
菜の花やかゝ人なき昊題女
此女裾を曳ひて志ゝう魂婦なりされハゝれ
ありて娶る人なさハ菜の花の咲てゝ人の来て
屋ゝさるなく咲ゝるさゝ面あゝれハ徒しゝなる
又外ゝうゝ植かゝゝ花ゝ而も含て菜の花を
昊題女ハ凡立ゝる掛合せ　下ハ大蕉の俳ハ
書てあれハ略す
評昊題女ゝ魂婦ゝゝハ仏の書藉ハあるや大蕉ハ
昊題女ハ魂婦ゝゝいふて意ゝさハ妙論ゝゝ西鶴ゝゝるハ
あゝりつまゝゝ事をいかゝ人ゝあれハ妙論なりゝ

あさりて書るそれを引て魏婦くしくハ真のぶあ
るる注釈こゝろ人なきこゝいハ醜女とおもふそ
易経文言の若のおもゆ而なる一一祖父の髓脳
なる精義集ま一句ゝ注解せむ人ハ仮令腰ぬけ
なりかるゝ人なきを醜婦といゝ伝そ夫題女ま
かさゝむゝよく身を掃除一て安一それかるゝ
人なきこと虚ま作りこゝるを若くして修飾てゝる
女なりハ後を妖する人のなきをかくおうくハ
いひなせり五燈会言云襄州居士龐蘊者衡州
衡陽縣人也字道玄世本儒業少悟空旨志
求真諦唐貞元初謁石頭又廬居士馬祖石
頭両處云ゝ家貧小一て休糧を市ひさ

きてもて終多ま充云ゝ又鳥丸光度卿の義墓ま
馬祖大師ま云ゝかさゝれて宝を海ま没すあらう居士
むすめ云ゝ汝余の句言を大虚の中を見てあさゝむ
ゝ

祇園水口ゝちゝ馬の祖
評曰句の解あまり長ゝしゝれハ略す只大虚小て
事ハをゝゝ

水世月の水を待小や水仙花
曰句上ようそをつきゝるもつまゝ曰ゝまつま
祖翁の工夫小一て幻術の第一とする而ゝ中略
一説ま土用中水仙の根を水ま洗小て植るなゝて
ふハ陸居小一て更ま曰句の意ま如くをゝ支ゝ

元よりこれ寸匂法実より居て虚より例くの而よく
考ふべし
評水仙の解より水ハ匂ハ匂より
故大流の説秋ハ小越の医師ハてよく極本を好む
宝玉と暖玉と一口よりふべし又極本を心かけぬ
人ハ心有まし〳〵て土用中日より水をそそけハ
必花ふ〳〵匂ハ出ぬの不玉ハ匂
公石云北越面度奥羽の沼脚も仕伝るハ宝玉ハ皆
匂法ふ〳〵てふく花をんる事うるひなし〳〵既より
花史より云六月の土用より入日始出〳〵毎日ハ天より
ふ〳〵糞汁をかけ土用終る日より極付て毎日水を
そそけハ花ふく茎立て云く又英山谷ハ水仙の

詩より借水冠花自一奇水沉為骨玉為肌云〻又因詩より
得水能仙天与寄寒香寂莫弄冰肌云〻さてしハ
和漢共より水をもて栽こする古今殆らし〳〵かゝ寸
伝とおもひふそ

尾張の心もとなうさ海嵐うの形

匂海嵐の形容眼芳体の秀逸こ匂外より形容の
匂皆去来ハ糟粕を迹るく変かゝ
評形容の匂ハ皆匂糟粕を迹ぬとハ大さなる癖業
なり〳〵祇園の匂ハ生なるハ〻ハ氷る海嵐ハ又
漢代山ハ明彩集より角文字のいくつもよある海嵐ハ先
この二匂形容ふ〳〵て敢て去来ハ糟粕ふそなりす
候るより芸やうハ有さうなもの糟粕とハさういふ

変小はあらず一こだくるゝ及ぶ今年紙の費なり
老ゝ一

茶の湯としてつゝさき日ゝも稽古ハ
此句古体の遺風こ宗鑑以来貞徳よりてる
此風多く狂ゝ歌ゝ見る花やゝなるを宗因の
風といふこれハ古体と云序文よりふ古今よ
わるゝ示よして一格の風ようてまゝ子蓑の
不変を示すこ試よ一二句を挙

かゝくしいつまて嵐ふきのなう　宗鑑
消ようゝ見てまたこの雪佛
山の端よ月ハいてゝうむく炭ハ　貞徳
うゝ石鑿ゝ多ゝの柳ゝ

茅のきやせ昊きのかゝれかち
拍いゝ口やさゝゝの女帝花　宗因
かゝゝあよ四ハ蓼ゝふ虫ゝ
なる鏡ハあゝ只す稀萩の如ゝ
小家なゝ膝をゆゝの火燈ハ

見笠の形ゝて祖翁改風奥ハの後ハ文よ
此風調を用いさまゝ寺さゝゝ其角此
風調をつくゝ俳ゝ絶ゝ祖翁の意を以て宗鑑
以来の調よして少ゝ遠ゝる而ハ蕉風の体よ
して初ゝの体かゝ場ゝ古風ハ只緩語を入て
俳言のみよして姿ありて俳情なゝ蕉風ゝ
俳云洒落姿情を体るをもてなゝ言ゝ

此龜翁の句ハ茶の湯としてとゝ云こゝてのよふたを
よく味ふ〳〵てのちとれを始ふ〳〵あるよ
おわく用ふることとて下ハの字を添るてふた
ふ〳〵て波と見ることふ〳〵あるよ用ふるこさしハ
茶〳〵やの湯〳〵やのと云てといふ言よ通ふて
知〳〵そしを緩行よ勢のぬやうする支こ
つめるこさハ異ることを日ふもふ物ぬるといふハ茶よツメルこ
いふ緩行あり湯よ熱といふ緩あり茶の湯と
一物の名目ふ〳〵てこ物をうけてツメ　タキ
緩行よをつまこ
評曰一茶の湯としの字を書を非こ茶湯よてすみ
さる支こ而又古伴の遺風とそなわ〳〵つま〳〵ぬ

兄やうこ夫氏精せ叢を去来凡北ゝ撰よ〳〵て祇翁の
後見の集なれハ蕉門髄脳の俳標古風といふハ句も
なすこと知〳〵去よよて他家の文林を探るよいこ為
あること文中ゝ跋よてもぬるかここの所ゝ古風
ものツメル　タキ　なこ〳〵押あてかひの注釈を記て
初ゝをまこたすこ支芽蕉門の俳諧こつめるこを日ゝ
是〳〵ふ日よ物ぬなこ〳〵つま〳〵ぬ所よ印を分て固辞
つけの注云伴同沢こ夏の新よ凡北ゝ水巻用も
鼻つき合寸数巻屋ふこ是こ沢ハ十月口切の
時分なれハ為よ聲古するハ粥師匠こ二人四十し
又也亜月の鼻つき合すハせたき所一大勢ゝ鼻を
つき合せての舎席　又つめるこを日ふもうこのぬなう

それを葉ゑ以メル湯ゑ焚なさてあゝ面緑酒沸
片脇いゝ〜笑ゆ〜〜粉ゝふさての下（パの字を
流るてふたゝ〜てゝゝゝいまゝ皮寸〜さりゝて八文
あめゝ下ゝハの舌を皮ゝまりての皮なる〜りれて
ハの字を流るゝ皮めゝ〜るこ鉢をりゝれすてゑ
ひさこ葉ゑ

入らぬゝて大脇ゑをおゝれて

又初懐紙ゑ

かゝしゝて下ゑのをゝる狐罠

松鴉独吟ゑ

世ゝて案山子を居〜関ゝ

此外されいさて又心かゝさて皆見パの字のれ

やゝゝあるまいゝ遍脇のかゝれさて〜ゝうれ丸のゝう
すゝも知〜

門前の小家も拾ふ冬瓜ふ

凡非ゝ医を業とゝすきれハ冬むをたゝゑ孫ふ

成〜〜ゝ門前ハ他ふ〜〜て小家ゝ自なりゝて

安〜〜下略

評門前ゝ他ふ〜て小家ゝ自ゝさゝあまり面見

なり冬瓜の事ハ大鏡ゑ委〜さて門前の小家ゝハ

皆見他ゝ見て〜ふ句毋〜て自ゑあ〜寸見皆邪路

のゝ底ゝりゝ起る見むゝ人ゑ仮せて論せす

本覚やおもひ切るゝ面の面

本覚ハ陰者ふ〜て陽忍の姓ゑ〜て歩ゝ

小竹を林中より追出して丸峰の麓に移す日
眼のうつくしくして小竹のもあるかもあるなどうつくしくそのさま
自他をおもひ切て大師欽念の祖師ゑもいふべき
面つきこと能ゑをおのゝみを含みてつよみ
あり絮よりこまりうる揮根眼ぶみるらたとし
評夜分小竹を林中より遠おすに間竹るよりあゝ寸その
間竹るよあゝうるものを架よりこまりうる揮根をも不拘合
千万なる解なり

浦風や巴を踏すむゝ千竹
巴ゑをの渦より巴をいふこそのたとゝ千竹の
くるくるとうつまゝ巴くるくるとは立ゑるをうゝ風の
たゞけしきよ吹影されて磯山の方へむゝゝと

乱なるうるさまを白俗にいふ中暑千竹のも
水面を回るものあれうるを三巴ねなる七数多の
千竹ハ皆巴ハなさぬこ
評それ村といふハ五戸以上の事かゝて四ねまてハ村とハ
いはず俗にいふて通りこと知てその寸村と字ら
解せるせぬよ村とハ俗ゑ支そやされハ家一戸を一戸屋と
いひ言あれハ言屋三戸屋三軒屋といひ四戸屋と
いふて出くよ俗ゑとるある事こ五戸屋ゑ五軒屋ゑも
いまぬハ既より五軒より俗の村といふ故こそれを俗のそ中
三四戸ゑこゝいふる言葉同じの杜撰こ五戸も十戸も世戸も
称をなす数より千竹るゝゝそいふ
あゝ磯や走りなしくるる方千竹

荒磯のうの子を風よつてきつめくるさま眼前
なり是の句をむ〳〵千鳥とて姿をかへ〳〵ちどり白ハ
友といふよりはるの友をさそひむつみあふて海涙
をそゝ〳〵あそぶさまあたゝらり村〳〵友こゝの是ふを
味ふ〳〵古人の一字をもゆ大事とも思ふ
評まりかくるといふ処は白の骨と和漢三才圖會ふき
千鳥の是第三句後百あり〳〵そゝ〳〵そゝ〳〵千鳥とかきるへ
〳〵千或人のいふまゝ千鳥ハ蛤是をうゝて後是世しそ
〳〵や又我俗ふて麦つきを唄ふを安けハ三盃呑て
千鳥あ〳〵道ゝ三筋てあゆましぬ〳〵すゝてよろ〳〵
するを千鳥是といふく三盃〳〵ひ三筋といひ千鳥是
こいひあの是をこふてもしゝ〳〵なくうゝ

友をなれを巡りよろ〳〵とまつ巡るそよといふ白波(さゝ)
はゝの体と麦つき唄と今の説とよく合ふをあらしハ
千鳥の後是ハなくさとあらしうゝ形千鳥の性をあらる
人ふ弱て知一

矢田のゆや浦のなくしほるゝ

矢田のゆハ越前の名所浦辺近きゝハ海の上ふ
ちゝ〳〵うゝ浦アふ通ふなくれふ来ゝ〳〵ふ言こ
俗略ふかふふ千鳥のなくゝ多ふいく秋来ふあの
俗アの哀ふとゝふ歌の俗ふあるゝく 中暑
又名所祇釈のしゝひハやとゝ知てふまゝ下〳〵
切字を用ひ二度ふ切事を祇ハ翁ふゝ云俗ゝる
やうふふ人ありてやゝとすれゝ二度切手慈の俳士

あり、拙翁の意味を言はざる故の変と又名所の
やわれすくいたり唐沢や矢田の社やなと切字なし
こゝふ一きゝと二段よ切らり三段よ切らり切字もしと
いや赤絵の能せよ筆紙ふてきゝ一かし初字の
ふちもせよ切字一ゝ加入て作す一一名所のやされ
すくいの俗八又よやす一一切字いくつへてきすなく
てよ一一とふ変熟語の続ふ一一くゝの場よ
いるる時論ず……
評文一流の論ずふ子者の者の俗とゝ曲もなき河者こ
面又切字の変を結ゝり新よ人よ論ゝ毛より自己の句の
てよもゝ故ふく相ふへ一一蒲和春與自筆ふて部し句
人の目の人ゝゝもあふ一一ゝ

さいか

夫おゝ一一涼一一楽一一なゝハ皆虚こ虚ゝおゝ一一れ
涼一一れたの一一れゝむすふこゝまゝむすふハ態の時なり
ゝふゝ一一流一一ゝ包ゝゝ見定ゝる法こ粧虚の
時ゝゝむすふまゝおゝ一一ゝふ一一涼一一かゝゝ
ふ沢ゝおゝ一一く あゝ一一 涼一一く あゝ一一ゝこ言ゝ
なる故のてふもゝなれハこ俗句八自筆よ書てくゝゝ
れハ筆者のあやまりなゝハいゝとゝ

尼やるゝく旅人宿し石新山
句言ハ昼尼の越よおなす一一石新山と石を定め
ゝる八ゝを場ふての句こゝ石新あゝの山一一白く瓦山
ふ一一て、素林の景色淋一一ゝゝ実地よいゝて

ゆく味ふべし　諸人の姿見るさま宮こ〳〵その人ハ性
宮このうつむきを石部山と言てるゆ冬の種振他所の
地名よりハおさ〳〵て姿情あると考へ〳〵　元祇翁
傳授の幻術と
評ハ但老今見やうよいしを人をこらかす
廣く他書を見よ此句ハこれ智月尼ゝ路通ゆ贈し
ての送別の句なり大ばよりの石部山を見やるさま宮さま
あの所を行かうハさこそと案〳〵る送りの情と
見やるさまの詞を除く考へ味ふべし　石部山と所を
さすのさうなのとも云ふ因ゆのくせ夏こそれを石部出
と言ふる所祇翁傳授の幻術こそ杜撰の上なり
夫よりハ句の居所ゆ言味の除さ決あり宮さの句

なれハ苔の宮さの所へ入（さをかゝ尻馬のつさゆ出して
殊ゆ宮ゆの苔〳〵さを見よと味ふべし〳〵
首出〳〵て初雪見たやさの念
此念を奥羽行脚の時さる人のおくりこるを
長途の糧森ゆ用ひむひ〳〵所の紙念ゆ〳〵て
此句ハ初雪を詠めこるる句ゆあゝ寺翁の長途
の対ゆ添て風情のうつり香余の賜といちのひ
なれこる紙念なれと狐腋の白衾より粉
まさてくりと世戸ゆ恢ひいさや〳〵翁の
風雅ゆあやかりて紙念をかりて古つ宮を
詠めよき句をもせをやといふ言を首出〳〵て
初宮見たやとおゝ〳〵他見こるなり翁の

風雅はあやうくて尤々八首出して世間の
俳士と交はらむといふを余義は含める句こと
さく〳〵
評首出してとあれハかゝるは絶なる例の人なか
れらしかゝる竹戸ゝかふりて居るはそ絶なりと
いへとも山は若は令衣てあるは目らくゝみて好くの猜効
をめくゝすと尺一寸は句の式と字玉て大切なる
尺処あるを先は令衣八通俗の令衣はあゝて首出して
はつ言を尺る令衣式とあるを無ふきを祖八翁よりの
玉ものかして玉る大切なれハは令衣と一入方を入て
句作せしされハ被らて居る形のゝ切雪のふり
ゝしハ首出して尺はやと風奥しゝる八明らかなる

かゝりも世間令衣を首出してゝ被らむやさう安
時八必風とふものはあゝて
附して云試は竹戸は代りて式令衣の因縁を被らむ
尺八奥の細尺の内出羽の玉なる伊のゝ添志弟して
山家の蜜はけ海辺濕地の令衣成変明らかゝ
それを大垣の竹戸ゝ方一易らかゝ八多向こされハ
ゝ令衣を竹戸ゝもひ切て其作変令衣は用ひむ変八
御恐れあれハいてや宝氏はけハ次ゝして師の肌花
玉ひゝ令衣はれハおのゝ分は引まゝひ歓新ゝゝは
うつゝゝき蛍の好てゝ引被さたる形のゝ要なる式
はつ言の陰ゝれハ首出して尺はやは式令衣ゝそゝろは
うれゝく深ひゝる一句ゝゝ読はかけて明らかゝ

さてしハこゝ省略ら此食ゑ對〜て一種こゝめハ我もの
ゐそと與ハせ給へる今眼前ゑ見るやうゑて神を
感ぜぬ斗なり

初雪ゑ寄る新居の〜新居のそ〜新居ゑ
雪のふるゑ新居ゑ出むと云ふ姿情言外ゑ
安てそりのそくとゝいふ所ゑ味ありて魂こと
探る〜〜

評のそくとあれハ新居の情ハ更ゑなし〜新居の支ハ
定家卿の奮問芸ゑ云いらはもなつみ遊る奮ゑ
曉七時より勤ゆまて三新居しを必なつむものこゝ
又尚時の新居ハ十一月末ゑより始るとゝいふ初雪ら降る
よりて新居ゑ出るこゝ安ら非こゝ初雪らふ〜初ハ新居ゑ

出ぬこゝ安え侍る以の外の安やうこゝ此句ハ荒奮のたつ
雪ら降こうしいかゝあ〜むこゝ只況ゑて見てるこゝハ句の
表ゑはらかゝ新居の論ハ此句ゑかゝそ〜ゑ

雪の日ら牛の子笠不由さりける

牛の子笠ゑまさりるらなりこゝいふゑかこ
評竹の子笠ゑまさりるこゝいふゑこゝハ古今未省有
のはこゝ竹の子笠ゑ伺らまさりるこゝ是必小本の
七新集を見てそしゑ杜撰の注をなすこゝ安こゝみゆる
但又元祢の子の字らよめぬらアハ笑止千万牛の子笠
ぞまさりるこ

かゝ鮭も空也の痩も空のこゝ
此句を侍の互照双関をもて評する人あ〜

さてしとは句ハ自然の情ふ〜て詩の格ふ習ひこる
ふあ〜す
評詩の格ふ習ふ事ハいへとも自然ふ主格ふあ〜ること
空也ひ〜鍾の双関古法の方ふ骨あり
萩祢ふや　鼻息白し面のうち
茶略す一説ふ白しとしてもさとしても
よさ不なるをわさ〜ひ〜と二度ふ切しるを
祢祇の親句なる故ことゆめるを祇翁の
俊宗来線の故ふ誤て祢祇萩数谷而の句ふハ
二度ふ切て宜といふ俗ことなし云切字の穿鑿
未練の輩ふ矣を費して益なし〜その
熟言ふ至て一言ふ倫す〜ハ句を白さと

せた眼おの不分明なる寸を弱〜白〜と
〜て現在目おふ〜てを柄といふへ〜を
自然のてふたるふ〜て別ふ求めるふあ〜す
よく味ふ〜〜ま〜て李納の句ふ為めのうちさ
枝形て晋子ふまつま格ふたるヒし今時蘭雪
の論す〜ハふあ〜す
評予を蘭輩ことい〜とも目も口もあり耳ハ形あり
さういふそちを目も耳もなき蛭輩ことを蛭蚓の
分として舌長き虎言分体なり〜まつ芭子ら
五元集をとこそかりて尺ふ五元集を自筆の
正写ふて鼻いを白ぽこありそし色翁の白ぽと
わあ〜引歪〜ふてそれても晋子ふまつま

さとしては眼前の而分明なる事白――さして所在
目前ふしてまた柄といふ――さハ文字目ミる愚昧ミる
云語同例こそしの字とさの字ハ五音のうち
イキシチニヒミイリの連声ハ皆皆白イとハ口て
いふ体と条を引て書時ハ白和白ハ皆文華なる
口と文ごのけしめこ白イ白キ白シ皆同体の
文字こまゝ以外ウ。ノの詞あれとも宣ハ略す
白イ白キ白シ俱ま眼前といかものこ志の
蚯蚓の分際まてハ安一ます弼急こ晋子ハ和と
作りうるとを翁めさく。ジこ書一ま安ても晋子ハ
重つまるやさてイキシチニの体をたゝめ

五言四十七字の意味ハ未徐の蚯蚓ま矣を費して
益なし――その熟位まるてハ方ハ一言ま諭すし
ものもの沢ハ俳則禍嚢ま委しけれハ略し呈ぬ
さういふ未熟ハて序文なさる晋子ハ書さやゝ翁の
代稿やゝこふして見分ハ出来むまふちと古後ハ
うす墨の一言いハのハ年の宿
落墨ハ一言の境を大晦日こ元日と隔て
云年と今年と歌の明るる日まちひあるを
年の宿としてうす墨まさこて自他ハる
なりハのといふ不魂こと知一――。下ま例の
長物語なれハ略す
評蕉翁の心風ハさうしむつゝ――ま沢まあゝす

堅隊の年の夜も三更五更と更け行くに伺ふ事
さけくいつまても拍音のするをさし方より要こる
斗ふて去来ハ隠者の支なし小胃の君ハ用を
厭ーて人静ハ除夜を惜ーむて世人を隠者
とのけーめをいふ句作なる支蔬ハをてはしけ
蓋てい年のまうけ四ー仕勢無世
立春の祝ひものふを仕勢無寿物多ー
さしハ年用意のまうけもの仕勢海老ひさら
田作ハー鮑無世炭餅芋隆くーらこゝろも
而ハよるーりし仕勢といひ無世といひ日ゆの
神祇ハ一ふーて一句の句摘こ支を仕勢
無世ふて年籠の因者の諸国より来るを

待まうけするをいふる句と或人いいつりるふ
ーーぬ説こ古人を自の句多ーーと云ーー
評ふしけ男西風の俳諧をさつをり志ぬと見てをり
仕勢無世こあるを海老餘餅芋の新の謎こハ珍説の
完上なり見む人頭を解ふ(ふる無を費するおよ
ぬ事なり
又一説ハ仕勢無世を日ゆ年ハ一の神社ふてかさり物の
用意をまうけるこゝいふも一句うてさ伝る石清水
加茂住吉こを外伝しの神ーこハ年の用意をすまもや
芋も因ーーく礼ハーーぬ二安清なり
年の蓋ややふし禅の裳ひり
枕風ハ郷屋敷ふつこ帝用勤るをし禅も今ハ

彼袴と為てひさの裳條あり〜や高仕ぬ古袴
よなりうまとと〜て〜しか畧
又袴一ロ云の裳條といへ市用勅るまぬさ習く
〜て一年の末と小ハ古袴の数裳條とけ〜く
出来うとゝふ言と尺るハ文字の上の解ホして
姿情なり〜

評時袴も今ハ彼袴と為てひさの裳條ありや高仕ぬ
古袴とハいんホも祢ちなるは釈と市用勤の町人
なれハ絶上下と着衣ハさう破仕るものホあ寺袴汁ハ
二ロも云ロ言やふれるハ必定なりされハ言踏やふり
説やふりうる古袴ロ裳くるもあるといふ句言ホて
明らかこそれを文字の上の解ホ〜て姿情なり〜

とハさつそり山風の俳諧を志ゝぬ蚯蚓なるかとホ
猿蓑冬季のうち三分一ハ大説の口文似三分一そいえ
すを志ゝ支三分一ハ杜撰臆説迷惑脈ホて一ロ尺して
元亦なり〜既て序文のうち
あくまおそる〜き幻術こあしさハ豈とゝふ言て
〜てたそやすあ字こあるおそる〜き幻術まあ寺や
幻術とひく〜文法ホ〜て文詞ホカを入て作仕る
なり是則アイウエヲのひくきとゝふを宴の支ホて
句の上ホも文の上ホも有支まて漢文ホハ〜て
ハ音を用ゆるこ
評まやうな音を用ゆる庶ハ庶ホ也日本ホ也一人も
なくおもふ〜アメまおそる〜きハ倭ふりの詞ホ〜て

さこ〳〵ハ大ヨおそる〳〵さとゝいふやうな義理ニアタとゝふ
詞ヨハ三色の文やうゥあれとも是ハ大の言ことゝ知て
アタニハタを略して豈とゝいふとゝ古今の孫説なり又
アイウエヲよく省くことゝ又音呂律よくこゝのひて
語路異多口ヨさまゝ今日言すみやうヨ文字正
さをこゝいふものなれいとやうな祢ちみやくとゝふゝ
已ゥまゝるる心よりゝ起る耳の時ゝ人ヨ安て居よ
是ゥ非をゝ分る〳〵されハ逆志拙の髮号ハ
定めて志をむゝふるゝとゝいふつもりなる〳〵れゝ是ハ
なく〳〵て志ヨさからゝとゝ訓す〳〵さゝや

伊かえの境ヨ入て
なつゝのゝや奈良の隣の一村ヨ
伊賀の境ヨ入てゝなさはゝ一ゥ蔦ゝ世ぬ
都ヨ書ゝるなり古注みなつゝゝさゝの昔の
京ゝ詞をゝ行りゝ〳〵い〳〵ア以ゥハ雨のわひ
〳〵さより奈良の昔の京をゝひ志のゝる
風情ゝ詠ヨ礼ての吟ふ〳〵てなつゝゝやの
五文字ヨて句をなゝ〳〵ゝと見〳〵奈良の
都をおもひなつゝみそこかてこの十時ヨ
多ゝゝゝハいゥ計ゥ情旧のおもひもまゝる
〳〵さヨさハなくて伊賀の境まて来アてこの
志ゥ化ヨあゝゝるハまゝ奈良の隣ゝと

おもへハ昔を志のふ情のやるせなきことゝふ
言なり
評に曰ハいとすてゝおくるる曰なるゝ故小只むう
の京とゝふ詞を立入しるとゝ千〻て大境ふハ秋
せ〻しこそ〻ハよしやうなる大君遠をゝひ出〻て
むさゝ紙筆を費すこゝ語因弘の次第ゝ伊賀の
境ゝ入てゝハ伊賀より大和の地ゝ入て京兵ハ今
少〻しゝとゝふ支ゝ京兵の隣ゝあ〻ハそれ眼前
なり入とゝふ詞ハ〻ハらか〻伊賀の境とハ大和の
地なる事又ハるかゝ京兵より伊賀ハ来るハ
入ハ〻あ〻ず出るゝ夫ハ播州嶋ゝ嶋津の境ゝ
播ハの次ハ播州の境ゝ日ゝ中皆初のたゝ〻

ハ〻ハ昔京ハ元禄二年ハ翁ゝ供せられて奥州
よりかゝ笑の道ゝよりて〻つさ〻れハ翁ゝ先
立て伊賀の翁ハ〻の方ハいそさ〻しゝなる伊賀の
御邊ゝ送ゝ〻夫より伊賀越〻て大和の地
ゝ入ての形ハ〻なれハ伊賀の境ゝ入てゝ書〻
なり夫より五畿内遍歴〻つるハ元禄二年〻
その所〻の吟ハ集中ゝ出〻り所謂。大峰や吉野。
初瀬の堂ハ哉。蓮捨舎破垣の庶子。月琴や児。
等皆主次第ゝあるてあさやゝ〻伊賀越の一附函
なるゝ故小ハ猿蓑ゝ入集ハ〻て大和より伊賀ハ
出てゝれハ曰ハ猿蓑ゝいむ〻ゝ〻名耳の
ゝ人〻の批判を以ハ納ハ〻あ〻む猿蓑ハ元禄

三年より四年の書とて蕉尾寸程い書あり
此一付而ハあやうくハいかの計の情旧のおひもまさる
つさふ云く情旧の為ひとるを弥らしさ文書なり
夫情旧こハあるさをおもふ義ふて情を
説文ハ念思ことさらしハ旧をおもふてよかるへ
情旧ハ云ひ為ハすと高聖上人の金言抄手
時〻之を見ハ張中の変をれハ懐古覧古抄と
こそ有へきれ〻〻〻ハしくを先度詩選を捨て
時〻むへし情旧とつふハ古人を吊ふ時の義詞
〻〻小児も知れる所〻て思ふるかを為ハ
九法の注解ふるハ為ハ

制禁ふ条〻

一古注を盗ておのれ為らしく書〻〻
さる事
一四風の俳諧ハ向て邪路解設寸屋〻〻
さる事
一姥堀の耳ふもよく分りる句ハ向て稀〻
の引事変して世用の事
右之趣能〻心得ハの上ハ釈ハ九為り
ゆ為さ者也
初形象戦ハ為ふて いふも年竟ハの為ふして
蕉門の俳諧ハ弥繁栄の基なれハお互ハよろ
ふ〻〻かるすや

七部小說

逆志抄二篇

時多伽藍の門樓

伽藍なる時の門樓八拾寺と定つる廣拾を門前より交て少〻林をまゝうけ門かまへたる寺の前ふて時多を定てその中く恐れ見送る京多定てうう

評伽藍なる時より門樓うとて寺と定爲の〻守門樓の大石姓も隨分あり伽のこ〻つけたれ

庶死た我妻てなけ杜鵑

拾女奥州と定〻〻八貞享の比彩吉原小て名とうるうう女より〻て風雅の道小もうと

かゝるよしなむさうしはその志を尽して和歌集
の例となるひて入集せらるゝものとなつてこそ
又風流といふべき花街は晋子ら門人数多あり
けり晋子より上方へ出てくるかや問ふを伺候て
遊廓の如なる句ふかくて句言そのほかれよその
夢を覚ましわ〳〵ひとりなれはもし
遊死せしめてもの事は塚へなりとも来まて
嘱て、さらせよといふ言くも〳〵遊死ハ赤塚へ
来なけれかてさ流と客くよふ筆と教ものすらう
恥をやゝて財をもまつとせて古き趣向なるを
さひ死ゝも一格言る上ふ〳〵て秀逸さる〳〵
又その分うゝの而ふ〳〵てもこの情ふきまてやの

〳〵世ゆけ女の逆意を尺〳〵ふ今時娼婦の
形ひよあゝ寸彩古今集よおも半ら
評予ら大読ふハ俗系の拙君さ〳〵家ふ言ふ寸
けれハ尺む人の心持ふて伝言すゝ〳〵さてこの伝者
よく〳〵人の口吉似を上よふするおふも美貌女ハ醜婦
なりさ〳〵て恥をかき又寝ふもマ予ら口吉似をして
恥をかゝ〳〵予ら大読よ彩続古今集ゝ出へきを
多吉あやまりまて続の字を書落せ〳〵こ
彩続古今てさゝ〳〵マ予ハ書籍をあてふ〳〵
恥を強意なる小彩古今集ハ六百三十年の
恥のなり彩吉の系の女帝ら彩古今集よ
〳〵て入さてあまりよ人北口吉似を

を〳〵時のあさつゆ京の手の梅ハ家々の
まゝくさ紀匂ひもゆう〳〵のむ
序文ハ晋子ら書るたとゝ不変の変を知ら〳〵
めて百変一方化すさしハ一二の句調ニ〳〵て解〳〵
ゆる変かゝ〳〵ハ句まゝ変てゝる侘ハて説変
又かさ〳〵まゝ臭さ白の花なるも白も床〳〵
俗アゝれハさて面白ゝもなゝ俳諧もなゝあも
くさゝゝハ方物皆土ハ飯するの句ひとゝいふ必〳〵
そのむらなゝ世ゝ飯もゆゝゝゝ義ハ〳〵て
よろつ火を消〳〵る時ハその句ひあるものなり
それをふひまてけ〳〵の句ゝ消シゝ訓の因〳〵
さハ俗をゝり又句ハ花ゝ臭ゝの俗を元ゝる

西蕉ゝ変つゝ
評そむなむつゝ〳〵さ西蕉を後ら雪うて消シハ蓼子
もハ臭ゝハ俗の菜ハツメ湯ハ刈キと因〳〵祢ら
みゆゝくハ〳〵て臭らゝあゝり見とふ〳〵て踏むし
床〳〵と以俗を解蕉〳〵り床〳〵ハ床ハ度
〳〵てつゝ〳〵元て居ゝれハ書臭ゝ白ら〳〵ハ
よてゆう〳〵と以ゝものてあらあら見て一字も
むゝハなるて〳〵元むゝ人勝をよりて変て

豊臣ハて

仏の子の力を後ハゝゝあゝゝ
ゝゝ玉ゝゝ見秀吉公を愛るゝ経波方廣寺
境内ハのり秀吉公を竹の子ハ比〳〵て千古一人

かゝて鄙賤より二十年ばかりすゝて関白
太政大臣まで経昇りあふぎをいふくちゝゝ
魂なり

評秀吉公ハ東山阿弥陀ヶ峯ニ墓ヲ築テ社ヲ禁ス
あやまり見ゆ

楚蕚云秀吉公ハ此阿弥陀ヶ峯ニ墓ヲ築テ
勅ゝて豊臣大明神と号ヤセ〜と号長の後廟を
うつゝて今京都大仏殿方廣寺の境内ニ移りまるを
疑ハ方廣寺ハいうにそや殊ニ豊臣の社ハいま
言葉ものの坂口ニ移りて摂州ニ移ゝす又紛ハ
方廣寺おろつゝ移ゝす〜京摂業内の人〜ハ
よく知る所なり

思考甚角々々ニ成ゝ成ゝ成るの樹の蔭の蔵る音ゝゝゝ
白雲ハ有為粉変〜てその零落〜てさひ〜を
を述て世ニ出る所なり

五月言わまゝ〜せる和ふて

屋根菖蒲〜並てふける菖蒲代
端午のあやめふくを白作りて屋根ニ葺ゝ葺ひ
てゆるふるあゝゝゝ新宅のさ海をつまの
所ニて見〜るゝゝ〜あゝら〜白〜ふゝさ
ゝる屋根の新宅ニあやめ葺の青くふきわり
ゝる所ふ〜屋根菖蒲〜ゝ〜ひてふける所なる
〜ゝ〜ひ〜〜ふ葺ゝ

評眼ゝ屋根菖蒲ニ並ひてふ〜〜作り〜を言地

恐くも拙景の句とハ曲こゝものうなる秋ふ五月三日
わるまゝ せる家ふてゝあれハ論ふ和よ
這者よりしやうか 下れ蟾の声
しけ句の論ハ大蔵ふ委〳〵解されハ幾もしいふも
おなゝ 変なしハ略す
ひ祢麦の味なき空中五月雨
見ホの句も世ふ双関の句法といふ中略しけ句味
なきといふ所ひ祢麦と五月雨の空ふ双ひ関り
ゝる句ふて味なゝ ゝハ食物の味ひらすきを
いふ中暑句ゝ旅中五月雨の十日あまり
陰つゝきて旅中疑義なるふより長逗留れ
うちゝ雨なるふ及ひ祢麦の味なきまらも

暑ゝるゝと雨てうゝさられハ麦陰も五月雨の空も
味なゝ味なゝといふ義と考る
評ひ祢麦と五月雨の空と双関とハ伺変て中双関
といふも
かゝ 鮭も
空 也 の 痩 も 空 のうち
見なりしけかゝ鮭の句ハ大蔵ふ双関と止せゝ
その所ハ又
しけ句も侍の互照双関を以て評する人なりされと
しけ句ハ自然の場ふゝて詰の格ふなりひるふも
あゝ寸ゝ云
眼芋双関と志れさる句を人ふ注すれハ双関て

なりともさてさしひ祢麦の匂ハ双関のけもなきか
双関と名を付るなせるやうなる地ら色くなしし
付るアく氣の毒やかの所老代の作者といへとも
芸かとゞハあるさりさ又藩中五月雨の十日あまりも
隆つきて在中敬義なるいう長逗留のうちち
給一なりぬひ祢麦の味なきようむ一昼くとも
何をもて藩中とするる又五月雨の十日あまりふり
つきてるとハ何をもて知る又在中敬義なるか
よう長逗留一ハ何をもてもる十日ゟ勿論
二十日三十日逗留一ハとて藩公竜顔て麦飯ゟ
出さぬしそしひ祢麦の味なきとハ影麦ら出来て
乃しハなやひ祢麦ゟうまくなくなるこれ麦か
かさゝ寸皆をてかくのあ一ひ祢ゟ麦てきさあハ
沼と相なるかさるそしさくもなるあるこさ平
さて茶持かゟ六隙八影のまひ方らあるこれゟ
うまいまついの訳てハなす一その功能の厚薄かよしハ
なう考ふ一
何くらゟ麦てなす一坂や五月雨
つくまとゟつまつくろふとふ徧語と
評つくりの徧語ハ竹くるとゟ徧語そしつくりつくろふ
文字ゟなう笑ふ一沒ハ皆大隆の口ゟ似なう
さて果なす一坂の名ゟ二百丁坂とゟ
大隆ゟなるしハそし知まいら
百姓ゟ麦か乳つく茶摘う

ひ今人〳〵已ら度業をつとめて怠らざるを
底言よ含みて茶ぬのいそが〳〵うとひつれて
茶の芽つむ比百姓もさや麦の穂の赤〳〵み
〳〵て刈入る時よハ涙うされハ元かゝると
いふを俗諺よりおそれて茶せ〳〵白と又麦つきうゝ
なともゆひやゝれて茶つみ唄より麦つきうゝの
うつアもそ〳〵〳〵そのいそが〳〵き中よ多述
上て唱ふもいと侘〳〵安ゆるを〳〵
評いそがしき中よ多くうり上て唱ふもいと侘〳〵
安ゆるさハ云諺因ひの立癖業と諺と俳諧なり
猶唄なりとつれもんのむするゆゝしきる時よそ待も
桑句も唄も出るものかそあゝすまして唄そんの

うさゝる時なりて止ぬものこそれいそが〳〵き
中ようゝふ唄ハ仕事の面白き時のまとかて
侘〳〵安ゆるを物まもあゝす鼻唄ひとうゝふも
心のいそ〳〵いさむら故小出るとゝ〳〵自己のんよ
引あて〳〵尺を明らかなゝむさて茶摘唄と麦刈人の
唄とおくよそもやあらし麦つき茶つみうゝ
別〳〵なゝハ百姓もとあるを〳〵さちゝを一生涯の
ものなれハいつれおなゝ〳〵唱奇をうゝふと云〳〵
は釈尊双方おのれよりとゝふ方およ多底よあゝを寸
ものなれハ外より耳のよく明ゝ安上よれ底の
評よ仕寸尺む人心を蔑〳〵つけて比境を安ゆけ
多ゝ〳〵〳〵既よ比今ら百姓もとあれハ双翼の法れ

作里方言

百姓も麦よりうすをつむ唄

茶つみも茶をつむ唄

百姓と茶つみとなれてうたふとも唄も同音同唱く
此所余りとよく吏ゆすハ安ます〳〵百姓もの如の字
ふてあきらかなり

志ゝの〳〵翠や茶山〳〵ゆ行夫婦つれ

近江滋賀宋ゝ名所こ伝事もなく一言下よ
白伝りて志ゝも若き夫婦の對の笠對の手拭
浴衣をも言外よ見〳〵てよハの内よ伝諧ありて
おの〳〵みを含みゝゝ茶山〳〵ゆ行きゝ俗諧ゆ
〳〵その地の云茶こ

評茶山〳〵ゆ行ハ茶をつみよ行こ伝れむつゝ〳〵き
ゝやあるさて夫婦つれこ音〳〵も則茶も例北
二度うつさゝ貞芸を見せむゆるよ是をもて今と世を
世言らなくハ茶山よりかさ〳〵寸麦刈稲刈伝ゆも弱く
所を茶つみとゆよりも夫婦つれこむつま〳〵く並面を
立てるものこ信宋ゝ上茶の出る所よてゝ茶を政所
といふ玉て言る料こ元祐四より出る所の茶所和漢
合せて二千余名こ委〳〵くハ予ゝ著す吳名大全
を見て知〳〵

白川の冥さえて
風流のゝ〳〵めや桑の田植うゝ

茶器寸法ハ象の風流のゝ〳〵めと作里西ゆ底言ハ

華美にして美麗をこむといつるべく繁華に
土地柄は古風を殆ど変ずるに至らず——奥羽の大部分は素
——て却て古風古雅質素の風俗を殆ど保存して
然る虎巳来の余風を忍び合せらるゝ変多かるべし
されば田植唄に唱歌も古風なるものを
多くあけてゝ殆ど奥羽の脚に風流見安に
始ることゝいふ言ふ——て風流のきわめや奥の田植唄
なるべしとひくくなかれ
愚老の大境地なり——里て云ひ句は奥源きはを
尽く無きるに——逐て古拙を記て解すべし
かに——て句言却てよ弱くなるとを知——
評奥源く解すべし却て句言ら弱くなるとを

めつゝ——さいひくそこそれをいろくはほする自己を
又いゝさる変なる——伝やらの書かて見——ら陸奥
の風俗唄の唱歌
オセンヤ〳〵オセン女郎ソナタノサシタル笄ハモロタカ。
カフタカ。ウツクシヤ。モラヒモ。カヒモセ又市右エ門殿ノイチ子
ムスコ女房ガ。ナイテ。リンキスル
大る田植唄とゝふもかゝる唱歌なる——田植らるの
唱歌とておよハあしそのうゝふ若ハさまゝあり
つゝむゝ予ら古々ハ若光るより一里吉田とゝふ左而
なり往古ハ越後の馬次くしらゝの所から新町ゝ
ゝふゝ出来ゝらはをもの左く而くかてうゝふらるを
吉田宮とゝふ、を唱歌のうち

吉田は京ノ東ノ水やう花ハサケトモ実カナラヌ

こうゝふその外好くの唱句あまたゝ長ハみな

おなゝ長こその外ハ時くれやり唄を年ゝ変ゝ

かたくるこの吉田若ゝ古来より今まする事

なゝ初はやうな唄を記まゝ一度ハ

一ゝくるさまあゝ寸米一田植畑植をそゝめ麦刈

婚刈麦播田中況或ハ歳つむ苗ハいくるゝ

仕事のたかゝ面ゝ夫婦喧嘩のウヤムヤをわすれ

おさむ六助ゝ恪氣いさくひと人の唄ハ後されて

終ハおゝゝみようるさすれハ一くもおゝ

むゝゝ寸さくれハその唄ハ後急の次第ありいくつて

ゆるやうなるハ盆踊の時次ハ少ゝくいそくゝ

田植の時次ハ終をやめなるハ麦播の時ハ踊ハなゝ

さゝ尓ゝてゆるさを後とす田植ハその指ゝハ

後ふて苗をおろす寸なくれハ少ゝくゝ麦つきれ

急なるハ只く杵の数さくおろせハおゝつけるゝ板ゝ

その外麦刈婚刈を業くの〻逆述ハ意ゝて後急

まちくさくれハさて我後悔をうるハあゝ寸力郷の

田舎ハ皆くかくのふさくなるゝゝそれを都舎の人

大ゝめて見笑する時「風流のそゝめ伝説の田植唄

ゝせハ後悔を上みふも甲州ふも新くゝきを変れ

一字ゝて余のふまうこかさる見その自さすさころ

盤石のゆくふゝて烏獲ら力ふも新ら寸変ハかゝ

のるゝ——ハ論我云ハ後ゝ人ハ耳ふくゝ人もなるゝ

ゑしと又蔓ゑ乃ゑ麦もない人ハ孫ちゝ[illegible]おもまむ
やと志ゑゝ〳〵俳優の実麦を書つゝぬ下つふさの
閑来芸ハよく呂律よかなひとゝ但係先生ハ
遠ゑせらゝ〳〵麦もゆしハをやゑ唄田舎唄の論
なりとておゝ〳〵むる麦なゝ

孫を乾し〳〵て

麦業の家〳〵てやゝむ雨蛙

孫を乾し〳〵てい〳〵る影書ゑその姿情き文へ
ゝり麦ゆゝ屋根のもてあそひ雨蛙ゑ指ゝ〳〵て
やらむと俳ゝるかて孫をもし〳〵て老尼のゝる〳〵
よさゝゆしるゝ毎三云かゑ乃ゝゝり雨蛙ハ夏季
かして枝蛙〳〵ゝふ〳〵緑ゝ冬ゆ〳〵てちひさゝ

蛙なゝ

評肝心の解〳〵ゝ麦をいゝゝす〳〵て雨蛙の[illegible]
俳ゝそしを志ゝ〳〵むゆゝて家〳〵ゝ〳〵〳〵ハ屋根の
あるものゝ〳〵んゝ俳ゝゝるハ洲ゆ〳〵家ふゝすて〳〵蛇牛
或ハ蛙の家徒刑の家形て池を入ゝ〳〵ハ皆家〳〵
そのい家を縮めて[illegible]ていゆしその麦ワ〳〵て屋根を
〳〵て〳〵ゝ孤ハ俳てすゝるや我俳ゝゑて蛍籠ゝふ
ものを作ゝるゑ小麦のかゝもゝてす

麦ゆ〳〵三本ゝちゝ遠〳〵
ゆけふ〳〵てゆ角ゑなゝる
一本ハゝつゝを指ゆゝ板〳〵

新地おとくるは仕上る不三合入の徒利杵五合入の徒利の大きさふ一てるもの女或るは少女なるの如く細工はして夜分ゆかれは出て蛍を入れ入さて家に帰りて蚊帳子法或は麻法の袋中にうつ一入て夜分ゆ泳ぎすきしたる麦めるの家一てやらむといふもかなら寺見るは彩一てるものなるむら山川百里を飛るつ仕とあるすこてもきかしさて又何故にさるは入てあるひまさるいふは新ての蛙ハ人のつの

ま(る時必小仮をするくさふ仮を目は大毒なり我伝法はて八蛙の小仮ら目はつけハつあるるひふ寺さふ仮を辛いら法いらもわすしさらさしハぐさむぜなくさ孫のさふ仮の陰るはて若目をさいする麦もあるハ大麦ことて仮名説を拵くて中いれて新るこの虫情心そしてなるしハ蟾ふも冬蛙ふも動くうこけハ一匂ら立すと気ーるふさ性を去寺ーてさら匂を解さむとする八彼象をさらるる麻法ふもおこるぬ一ーー匂作の動くく動らさるハ只は一匂はなり味ぬ一ーー

衰さや盲麻刈家のさま

麻布の刈必時分帯ら麦さま盲目のかる人も文

アて刈居るを見廻て作る白ぶーて下畧

又一説ニ盲麻といふものあり

評盲のかゝアと人の麻刈ときふ有て〻寸又盲麻と
いふもの仮令ありても夫てもあさ中の五文字なる
ら寸是ハ盲目人の門畠なこのさまよーて歌ニそ
人教ふて刈時ハ盲さくりまこふやゝかうやゝ刈
居るさまを歌るくしたこのうもアる人あちちひ
きるつーー猪ニ麻ハきまれますれハ見ニよへー

波アりけて藻の花のそゝ流ゞ
波りりけてそふようりくと伊の乳もなく小橋を
行るる風情ふーてふと藻のもの咲るるニ乳の
分てその流をのそきアるさまニ云ハニ実ゝく

ちらも藻の花ハ橋ちこうこちら波
評橋わうりかけての今ニあゝ寸川をこすをわゝること
いふくそのぶアをて流のかゝ一ニ藻の花ハ咲てあるを
のそきアるこ見角ハアるく人ハんニ住す

素堂之蓮池を過る

白雨や一蓮一枝の秋あさま

嵐葉素堂ら蓮池を詠めて久立ニあゝる
元令せなり素堂ら志名利のやうを放擲ーて
財ニ白ゝきもせーーその乗貨の禁をゆひ
隠逸の情を含みて秋あゝまし西蔵せーー

愚考西上人ハ蓮ちなゝ位ちかゝ世ニ生し来て
かゝるちうをめめのやうハ見ホの趣ニ似ゝり

病後

空つりやかりらかゝ〜百合の花
空つりハ上つりとおなじ〜病後逆上すると百合の
花の咲かちなること云合せそう
評それハ指南よおよそ寸ゝ慈ふて
あゝさゝ〜なり百合ハ傷寒後の百合
病を治すとあれハこうしたこそ白の根ぬ
なれ花をおもへハ傷寒の病後成へきもや
すゝ〜ちやふ茅門よ荷ひ込
茅ハアサグサとほりてよむ〜〜俵茅の俵と
同意〜俵緑の茅といふを略〜るふてまゝくま
せうる茅よハあゝすゝ寒の茅も茅みこゑの

茅といふ義ふ〜て彩とりみんな含みて彩といを
すゝて余意を発て安せる〜ゝ
評俵グサといふハいらなる茅ゝやグサとふこるゝ時ゝ
茅の一名よなるこ角カグサ董グサ余ゝ拝て知〜〜
さて茅茅と書ゝ仮を見たの文字なるや七部集ゝ
彩茅とあ重近代の小なよ俵茅門とあやまちを
そしらよ〜〜おもかての心ひ射を夫ゝ茅よかゝ女
夏こ代ハ彩茅を刈て来ゝる馬の秣ふ〜て
彩茅ゝ肝要ゝさしハ茅ゝ取ゝてよむゝ女伝ゝ
初人の茅かやゝ女夏よ化さしあふな
千子ゝ方まゝの茅ゝ〜るを変てみのくま
よう去変ゝ〜ゝ中を〜作ゝる

なをさ人ハ此ハ神も今や去用于
千子が去来ら姪こまそかゝ〜おもひ出す度のみ
多かゝもと余情皮てうう去来抄の中さその去用
于ともむ只中〜はゆかこさしたうとていう感情
你さすゝ〜ゑてうを今や去用于するらむして
ひく〜ゑ小説〜
評去来が妹なれハこそ去来ら体〜中をすと、何ゆ
去来が姪なれも去来ら中をすと書ハそ
なゝ文法〜初人の人よくゆ文義を味ふ〜
去来が妹の事ハ岩ゑ出ちうゆ神の変ハ蔵京大令
ゑ云表着神表天二すゆ著ハ小なう敬ゑ小祖といふ云
中古ようゆ婚布の衣裳を押なくて男女ゑ小祖といを

夕ゆ〜や兀並ひさるまゝの峯
ハゲ並ひハ兀山の並ひさる形〜いを事ゆ〜て
夕言やの文字ゑ夕日のちゝ〜うるゑ面まて
兀てうう兀うて峯〜うけさるゑつまゝ
評接蓑集ゑハ岷並ひさるとあるを、何敬ゑ山篇を
元さるそや兀をハゲ並ひさるとて後ゆ号山ハなし
それハ接蓑集の謎ゑなる敬ゑ岷ハへとかなを附
て山をゑ世さるもの〜京を私ゑ書直すハ今まの
言を皆失ゆ〜字典ゑ岷ハ禿山とあるやたうをば
山なう兀山の文字も二十七通りの書方ゆあるし
委〜〜ハ予ら吳名大令を見て知る〜〜
又夕言やの文字ゑ夕日のちゝ〜うるゑ面と

見つくるまで出来なき解くちらく、うつるまでまく
加山の南山の東山の稜に雲してあるしかすこれを
日地中よりむとする時にて西の方にある雲の
峯のうつろう丸山のなかひさる空の赤くみゆる
所をもてあやらくみせさる夕暮やの句柄こと
知へし夕は月の字の片われにして日入月見ゆる
の義ときれは夜の字も又夕に文をくまへされは既に
エキ・テキの二音ある月も夜の字の片われゆゑを
日の入時は中に少しくあるを示して夕暮の
二字を月にあらず日にかゝるといふ義理ありて
南加茂の三方の山は幽に西の方は日光のてらすを
見出しての句作にて手眼一流の勝を発こして

の骨折流石に去来の俳力のまつたき所に放ちに此並ひ
さるゝにはへとかなきは附さるゝ元として一句案就
せすと知つし元禄の俳諧にむかひて文化文政の
人を用ゆる八十年の落魄に去年の芝をもて余
するかごとし熟くもとめて落を活するを又実に
あるへからずと知へし されはかの白雨や晴嵐とす
日の夕時日の夕ともに日暮る時を日夕といふと字典
に見えて夕晴は則会叶して夕暮の話こと又月夕は
晦日こと朱夕は朧ことといへり

芭蕉翁は何になれとや秋の風

いさゝき破れやすき世残茶のあはれき秋風に
吹破られて果を何くらむならむ人も又黄秋風を

俗てすべハ仏のとゝなるらむそハ蕚と成土と成るのゝ
なりと観意を含みさるゝ
蜀葵円枝活法ゝ秋風葉索音芭蕉は言を言
ての作ゝ妖風は殺氣なりすれハ万木一刀葉の雖言ゝ中小も
芭蕉の殺し安さゝ悲むすひさるハ芭蕉は一刀破さ
ものなゝ活は勾もは勾も苔芝を会せさるゝ
彩雲や鬱金畠は妖の〻を
彩雲やさる畠なゝハ半畑かてきて云人あれと
そし小てそゝ柄もなすー鬱金の金は字を秋ゝ
うゝかせ西方ゝて又鬱金の色の黄色なるゝ
金氣の西をふまゝさん鬱金の葉ハ檀特ゝ
葉は紫ゝ依て落花の紫を七八枚も大さゝ

たるゝこゝをきゝものゝ蕚もよく墨もの
なるゝ秋の彩風は彩色ふき
ちゝす京色を匂仏るゝ
蜀葵鬱金の色は黄なるゝいつれ
金葉の不を不へさゝハ非ゝ黄なるゝ
吉ゝ〻て金葉ゝあゝ寺黄赤白の
色をゝ色ゝ花ハ夏ゝあゝ寺
文月や六日も岩の秋ハ似す
古今流諧新ゝ六日の夜は彩ゝて
門ゝ〻ゝてゝ今をきゝあけゝ

あまのかたちをもやつさうん
余ハいまだ考へたるなれハ略す
評曰老ゝ大隆白解ハの注釈を
こゝ作るなり家抱らしく書り
会歌の本は紫越もいとへ昼の歌
△此解もむりよりの云傳へこうる
所ゝをこゝ作出すのゝ多ゝ寸
剪へ引帝をもゝ新後撰堂集の
毛夕の寫もうゝみもいゝすして
一応はもよいひつくすらむと出たり

予ゝ大隆よいひつくらむと筆去の
あやまりぬるをおのれ自筆又事
なるゝ寸きまゝ出をしハ云傳日記の
くせものゝ一指のうちよいひつくす
へき中ゝ云つゝさはぬをいふ帝と
芝ホの注をまくらぬハあ寸寸
是昧のかきまゝなり
七夕やあまりいそハふるふへし　少年　杜若
少年とあれハ兎毒と一年ゝ一変あふ
庶の余之一云下ゝ云下して志ゝも

俗諺あるなり又おもふ〜
評史書をお年しいふ変古今陽らしき
注解し人を自分の楽まらんてのたわむれ
笑ふなる注なる似さる木槿が
此句木槿の蕾りたらなきを飽忠して
槿花一朝栄といふなる元て云く
深槿花一日栄しとハ小児も合点しく
居るを一朝の栄とハ学て物くも
つくしより陽りけるなひみて
いふ山なて和せなる留れく

君らなるなる忠〜〜花落
去来ハ花落の春なして向井平次郎と
いふ父ハ彼地祭酒の氏矣よして後ま
京師の医官と成云く
評去来ハ祭酒あるとハ云ふ日野の
癖業と　禁中なてハ文章博士と云ふ江戸
なてハ林家也一人なるなるや祭酒なてハ
なく大臣辞らなとの習遠慮〜〜引言と
大慶の口吉似なれハ略す
初丁なる彩絵さる女枕もと　元人　落稿

古人とハ今世になき人といふ義也
評古人を世になき人といふ事ハよく
知て居る読者からいふ時ハ知らし
かるゝハわけかある故に紙の便となる

葉月也天橋に渡る人ぞめむ
葉月やとハ葉月也とよむへき是ハ月や
とハ雅なうす世ミして一句の姿情
よく備るへし　此句主意の知すなる
ミへし　俳考をもちて補ふへき是
故葉ハ矢の字に縁を求て作りたるし

評葉月也とハ本書に既に出たり
葉月やとあり都て是書人の筆くせ
をよく心定あるか大切なり精藁集の
書方　なりおりや　葉畠や　月影や是
やまあるきたるハ誤らなり　羽葉に矢の縁大笑也

三日月に鯗のうつくまをかくしより
鯗の字下本にフカとかなを添るまて
解しかたし　鯗の字にフカといふ訓ハ
なしてかきちらしたるハイカとあるの仮名
の形違ひなるをしるへきされハホシイカの

変して今云スルメと
評義すれハこそ月まあらまをかくせ〜
千鳥紙の月ハ天窓を隠すとハ素遠ひの法法
なり白玉の蘆と例ふスルメとハさわけの
上なり　大筵ハ素一名れハ参考すへし

信正の妹ハ小屋の中にあるなり

此句ある小屋の名を雲て仏なと白業を白色
波巷山の信正ハ信を思ひ出せる位こそハ
大和物語ハ良岑の宗貞ハ業平の業
わすれて雨いとふ後名ハあるる門の

小家のさまを思ひ出しいとさておれハ君ハおられ
ぬまをてかたらむ世をそしとおもひて法師ハ成なり
ときの人ハをミまはけきあるひまやるこて八ちきのの
ふるやの中ハ荒れうらさしそのの庭の草ハ
よみてかの文条の小家ハ女のもとおくりるよて
信正のいをこれ小屋の名とその女ハ衣うるせての

一曲なる一ときう

謡子ハ七ハ大筵ハ一書ハ云ハ役ハ山信正のうつふし
そめのことよみておくるひ物小屋のさまをときこと
うと出寸今ハ此句遍昭の伊ハ仮て伊ぬ石あしに
先ハれまもこのせて遠考せむとのうるこさそれを
例の口ハ仮ーて妻ーーく我ものらーく書て又

和を引うけ給さられ遍昭の妹にてはなくかりの
宿りの縁によりてはかりの引事まさに更まあくらさ
ミえ一〇遍昭なりしハ大殿に委〻〻書〻りしを
似て似ぬ心なりしハ先に彼の形計出〻て置ぬ彩色の
人考ふ一〇予も又試に一日世色俗色に妹の小屋
とあしたをハ大きなく母をなく又兄弟迚もなき一人住れ
女ゝ〻安〻て〻を面祝も兄弟も皆死失て細き竹を
立て独住女き見ゆるを今の俤うけふてよく
安ゆるその見れ猶心を杖ゝも杖ゝも形みゆふかの
ゝ実よりも不見なき俤色なしてそれに若せまあ
せむと花の音も片拓るふ〻てかよゝ一人不見れに
ゝ居るを見出〻ふの句作ゝ〻ゝ〻ゝ一人れ

ゝ〻ゝてなゝれハ句ふゝ〻ゝ彼隙洲祇隙に若せ
むと〻ゝ花を冬の日集中に高世西花隙洲に活ゝ
高世ぬゝ〻ゝ〻ゝ祇隙れ母ゝ〻ゝ境に知けて〻ゝ
〻〻〻余の家れ花ハ猫くゝ空〻妹の小屋れゝ〻ゝハ
あゝれにゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ見出〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
形見人の興者ゝ〻ゝ〻ゝ

一鳥不鳴山更幽

柚の音ひゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ案山子ハ

一名不鳴ハ王安石ゝ詩を影〻〻〻〻句を作る
支人沿〻〻其角その要旨を沿ゝ元北ゝ句又
よくゝを言ゝ沿ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ中暑 都て詩を
題み〻て発句する支俳諧服作ゝの格ゝ〻ゝ

評王荊公の詩を題（漣山郎事）洞水世〻麦僥
竹流竹西花草弄春柔詩界篇を對坐・移日
一句不写山文幽佳句の一句を奪ひ取て妖の
句の塔書よりして案山子の句の光りを添る〻一句不写
山文幽の句を統案して一句も写さるハ山田の
稲を刈取て尽るハ稲の穂を拾ふ為至て花を
今ゝ取りて八雀を勿論山雀四十雀のおひさく鳴す
案山子を用ゆ也久れハ〻ゝるを拾ふ〻きまゝ〻
拾案山子の句ゝ取りて〻ふ句意〻を書ハ只山田の
案山子と支せむ為なり又拙の音〻聲を五文字ハ
杜子美の春山の詩の句を伐木丁〻山更幽〻りの

その木を伐る音の丁〻とひく〻も今世て句作せ〻
案山子のこゝ句に〻るを句此仲まて唐宋二子の二句
を〻ゝ〻るその巧〻なる口を俗語を以て〻ゝ
杜甫王安石を人形のたゝくを主して句〻せ
俳力今的の俳諧と席を同うして論す〻〻
作者ハ他者ハ器量を次第形成力象尤生一始生
して句作するを翁を一人を引うけて尤人の巧を
夫を是これハそれと一〻安命て是非を定めるふ
文を尤人を者あ〻寸感〻てを形あまり〻ゝ
又百四十年を立て解す事なし八是仮初の芸文を
あ〻さ〻ハ〻〻それ少を仏の〻中詩歌の為を俳諧の服の
格る〻〻と去りを世面事を忘れ〻〻〻〻情士あさて

初心の毒をのこす羅漢の寺初心を見をはて
錦嚢の花〳〵夫のり彼〳〵つゝ彼より見〳〵さつくるの
大事なりこれる様なあさまし〳〵こそ拙詩歌をくやま
あら〳〵集なる世水の十六句あり之中一句を示す
題　白居易礼佛名経　仏名の礼なる勝懐く自驚式
見なり之外十六句の仕方を見〳〵詩歌ハ詩の言也
有の侵なり〳〵ひ込なり和哥の歌をおなし〳〵詩は
端言ハ外のなり〳〵言のさなり〳〵て一句なひらを
侵なること知〳〵見ハ大切の事なれハ初心の輩
よく〳〵ゆて金一さ事なり

蔵枕麻のつき合ふ影の下

山吉旅宿の掛紙を形容〳〵る句かゝて

枕ミいよりつさ合せること云なかをそれは影の下ミ
文〳〵るまつまゝ麻の角よりつき合ハ像なるし
寝まふ屋の枕さ枕つさ合せて寝るを孝詩なを
うけてさても麻とつき合せるこ句作りて影の下ミ
〳〵て内外のなるをもわってること知〳〵云外な
影端をく麻の末なる山吉れ旅泊茅屋のさま
おもひやる〳〵
平麻と旅人と内かる枕つさ合すこハ大なる非こ
麻の末なるを文るあ〳〵寺旅人の枕もこの
影下なて友麻の角突するを山吉旅宿の夜色
鼻きあなを文つけてあるを鼻らはす魂を方なそなる
をかく佐仏をと、旅の身なを文ひ〳〵牛の角突

麻の角突といふ事もきゝぬべてこの行を知さる、
きゝさるるはせすーて人と麻とまくらつさ合せてこハ
弥説〳〵笑ふ〳〵ー

田なら君のうすてらし菊の宿

田舎君も蔦徳の〳〵ぬ白まーて実ハ住住居の
菊の花をいふ事〳〵なる白〳〵住居の菊をいまむこて
その住居ハわひーしさを述〳〵る白〳〵安〳〵ー

評田舎君京君之外の事の寸法ハ大概ハ委し
田舎君もうすてらも入〳〵ぬ抱〳〵ハ如何又田舎君の蔦徳
ハ住居の形容〳〵ふもあ〳〵寺京より外ハみな
田舎君〳〵きる〳〵ー白の魂ハ蔦徳〳〵きる〳〵宮服〳〵
平生事〳〵の上ハ居〳〵ハ蔦徳を義ハ如何寺不明ハ

蔦つらなみの上ハ住居で宗入の来るよりて逃走ハ義
きる〳〵殊ハ田舎君〳〵ていとせまき蔦徳を見宮
きる〳〵形容新変ハきゝ〳〵宮ーとアゆる義ー

神田祭

きれ〳〵ひなの拍子のあはるぶ
神田まつりの鼓らつおと
拍子きゝあつまりあつまりや
花すゝき大名花をまつり弓
きれをこそひなの拍子のあはるぶハ安〳〵祭白
まして神田祭を吹せー〳〵それは又照白を陽て
神田祭の鼓らつ音〳〵せー〳〵それを嵐雪の句ハ
出ーて詞をそ〳〵て拍子きゝあつまりとやとハ

あつまりなまりう拍子ふも字ゆゑとしてる事

以下皆大隆の口まね似引ぶせ又皆同一にて八略す

評さ仕ハこそひなの拍子のあはるぶハ數星の舞ひ

伝を見ていやゝむ神田祭の歌うつ音まてよ影

一首の歌なるを二ひよ引裂て舞ひと眠なりうハ

あまりなをうーしきは尺入尺る人膳をつゆ多

見のみなるすは當の句れ引歌も皆大隆をよ信書て

引ーハきゝ意を以如仕方ゝ數星の歌をいま一篇

七部集を見て歌ひ盛白ひのあやまりを正すへー

隆奥の歯よきせかゆや秋の言

きせかゆゝハきりうの事かりう下畧

評歯ひきせかゆゝハ伝のなり。支ゝ字ゆ系ゆみハきゝ。ひと

出て予ひ大隆よきせかゆゝハきまるきゝとは一

是り先ふきひ年老の年くせをよく見きめて

後伯歌よハかるつきを今の正体も見定すーて句を

解支暴お千万ゝ系ゆよきをかゝとありて横みの

一部のさの字皆。をして書ひ元ハきせかゆハ元来きき

ひゆるをきせかゆきかゝなゝ口かーて書る

支云語同形笑ふ一

上形とかるる事ゆ秋の乙

天ハそらゝ候了上ハ辰巳風なきよて小沙手

あるよ下の風ハ小よーて白ゝ南発するさまを

形て来るこよ上下の風手をわひてひ伝支ゆき

逸向よりてまた一ま又賞すべきさ
評それハ句の表よりハ一句のなりひハ
天の一字に空で書すして天と書る上十二文字ハ
なり秋ハ季を定るのみ事の仕来ハ秋よりさきすく
いても秋ハ天のてる事四時の気上こさしハ漢土帝
の秋風の賦一宋玉の風の風蘋叔黨の風
風の賦ハ皆是秋の殺風景なるを風一なり
故に天のてるさをおさへて半天の事の仕来を又其
ゆるに天の字こ拆天地の百姓ハ空
りの八九百空て雨ふる又空蒙空漠さ外拆て無し
炭俵に其角の秋の空尾上の松ばかりてふ
句ハ陸に天の字を書て終るへきなり

新のかハ鶴眠るに月のさこのうハ
はの句新兵の中ハ(を)結すきをめるに千年の高節をかけ
合せて志ゆを宿眠る百といふ所一句の魂こそハ江湖集
の跋を書しる抗州の琥和尚の暁窓といふ影
小て曙色終分眠く明。陶是壬僧遠峰踏詩和作
屋茅屋下。尚有梟松窟未醒といふ忍び合せる中略
はの窟ハ人百の結有をたなし切るに依て皆宗世を変小て
眠て居ることいふ義小一て暁窓といふ号の人を知るに
孤云一ゆる結こ又小溪猪令衣詩ニ云白雲一片寒於水一
只合ニ松窓伴窟眠一といへる境界こ是てゆけ句也
一猪一て俳句ともす一下略
評暁窓といふ影ハ暁の窓といふ義こ暁窓といふ

人々ハ寄ニ曉ニ――欵櫓ハ窓のレンジなれを只
曉の窓なる夏必定ニそれハ兎もあれさうふて点窓の
鈴森をしゝうちよ鈴点ハ窓ゝふ夏よハあゝすき
ゞ夏ハ陰を恋ヒ――陽を恋む故よ夜半を知る能中
秋の夜寥寂ゝと至波――祝ゝる秋寥ゝを悦ひ
昭あゝ――て鈴の音少――ゝ眠る見秋鶴の冷ゝ又間ゝふ
字ハ門ニ月を書て鈴の音霄の音茶の音中の音なゝ只ハ
少――の音をゝそい（霄うゝ森て夜のゆくもかまゝす
眠るハ音ゝハふ――うゝす鈴点の咲音ハ一時鶴も一時斗森る
ゝ寂よ秋鶴の本情を尺出――て慕よかけ合せうゝと
知――兎角ゝ事柏の性を忘ゝす字義をよゝ知ゝ
すゝてハ美――ゝ解ゝるゝいふ夏あゝ――ゝすゝて知――

ゝくゝゝの鋼ハ米音陳道よ変てゝ
ゝゝれる名柏ゝ
ゝゝ――みよ――ゝ鋼よ米柏ゝ名
○江尻　江端　江脇ゝ名ハ三穂の
松原葉風南より来る
宿引――や三穂の松風葉ゝる
○府中　常而ハ竹細工のゝ川を
ものを製――てゝうきてゝする人
おゝ――
誰ゝ肌をあてよ米休婦人

○丸子　鞠児

名代なるところ〳〵古友ハいくちなき

○長新　長者　志〳〵ゆ蘭花よて

若水あ〳〵うせんゆ豆腐を啖ふく

解すく〳〵ゆ又豆腐ゆあ〳〵〳〵

大根の志ゐり汁を沢山ゆ呑し

入物は水あ〳〵うせゆ豆腐ゆ〳〵那

○茄枝　山而八花生花芝むしろ

を業し〳〵寸

短歌を名い長尺　森茂代

三都

書林

京都三条通弁屋町　出雲寺文次郎

同　寺町通松原下ル　勝村治衛門

大坂心斎橋通小倉新町　河内屋藤兵衛

同　安堂寺町　秋田屋太右衛門

江戸芝神明前　出雲寺萬次郎

同　芝神明前　岡田屋嘉兵

同　同　日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛